



急に夏になってしまった。浅草から歩こうと思って、東武線に乗って、外は暑いだろうなとまぶしく見ていたら、新しい東京のタワーを作り始めた現場が急に目の前に広がって、そこは一面の赤茶けた土の熱気の中、大きな機械がたくさん集まって、どんどんと穴を掘り始めていた。歴史のひとつになるんだろうなと思いつつ、ボーゼんと電車の窓から見ていた。浅草から、花火の準備で、鉄パイプや網でうっとおしく固めている水辺を、足元の影を追って歩

いていると、向こうから白人の大きな男が、白い帽子に白い短パン、トレーニングウェアでゆっくりかけてくる。白人ってのはどこにいても、自分の習慣を崩さないで、生きていく生き物だなー、習慣を崩さないというのは良さそうだが、身勝手と紙一重でもあるなー、このクソ暑いのに、倒れたって知らないよ。と思いつつ、右手にしっかりと、サッポロ黒ラベル500ccを握り締めて、ぐびぐびやりながら、走り抜けていった。まあ、どーでもいーのだが、その辺でこけてケガでもすんなよ、バー口、と思いつつ後姿を見送る。世の中どーなってんだと思いつつ川から離れたら、70代後半くらいのじいさんが、はだしにサンダル、灰色のズボンにステテコの上着、しわだらけのはげ頭をふりつつ、大きなソフトクリームをなめながらやってくる。これもまあどーでもいーのだが、何かおかしい。信号で止まった自転車の若い男が、前かごからパンを出してかじり始め、ペットボトルを口にしながらまた走り始める。そうかと思うと、同じ信号で別の若いのが、突然ジリジリと電気かみそりの音をさせ始める。女たちはペットボトルをあおって平気でどの奥まで見せ合って大声で笑い、首の肉の間を汗でにじませた顔をプすっとさせた。太目のおばちゃんは、首からさげた大きな布に毛染いプすとした犬を入れて歩き、「この子、この暑さだから、歩かなくなってね。」などと、近所の似たようなおばちゃんに大声を上げて、汗を拭き、またペットボトルをぐびぐびと飲み干す。なんだかこんな世界で生きていくのいやんなっちゃたなと、ふと思う。日本っていつの間、恥も外聞も、見栄も、つつしみも何もかもなくなって、なくなったこと自体にもなーんにも気づかないあほーな社会になってしまったんだろう。矜持なんて言葉はもうどっかに飛んでってしまってひさしのだらーね。などと、湯豆腐頭でぶつぶつ言いつつ過ごしています。

そんな中に、今月はもしかしたらアフリカに出稼ぎにいけるかもしれないというシャボン玉がふっと浮かんで消えていった。赤痢 コレラ、マラリア、その他などなんでもまん延中、まあ、生命保険や身代金保険くらいはかけてくれるが、自分のことは自分で守る。難民キャンプ、軍のキャンプ、ゲリラの皆様など全てそろって、飲み水はまともなものはない。夜間外出禁止。そんな中で1ヶ月程度のテント生活、それって、いーじゃありませんか、生まれてきたかいがあるというものです。なんだか嬉しくなってしまう、暑いだろうから麦藁帽子でもかぶって、いこうかなんて気になっていた。まあ、いけなくなりましたが、いつか行きたいなー。せっかく持って生まれて、少しずつ鍛えていった命を、それを守る力を、ギリギリの線まで使ってみたいものです。ホットな夏です。今しばらく力を温存していこうと思いました。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TELFAX 03 5600 0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com